

MAG EVO II Series

MAG 600H EVO II head

Track40,41



優れたコスト・パフォーマンスと シンプルな操作性が特徴のヘッドアンプ

front & rear view

前面の様子。上位機種に見られるトーン・コントロールのスライダは採用されていないが、3バンドに加え、340Hz、1.6kHzという、ツボを



突いた帯域に効くツマミを装備。さらにサブ・ハーモニクスやコンプレッションなど、アッシュダウン独自の機能は踏襲している。

背面の様子。入出力系は前面パネルに配しているの、リア・パネルはフォーン・ジャックに対応したスピーカー・アウトのみ、とシンプル。



2基の冷却ファンで効率的に熱を逃がすなど、構造面においても信頼のおけるアンプだと言えるだろう。

SPECIFICATIONS

●出力：575W RMS (4Ω) ●入出力：インプット(アクティヴ、パッシング)、エフェクト・センド/リターン、DIアウト、チューナー/ライン・アウト、スピーカー・アウト×2 ●コントロール：インプット、ブライツ・イン/アウト・スイッチ、ディープ・イン/アウト・スイッチ、EQイン/アウト・スイッチ、ベース(100Hz)、ロー・ミッド(340Hz)、ミドル(660Hz)、ハイ・ミッド(1.6kHz)、トレブル(7kHz)、コンプレッション・イン/アウト・スイッチ、コンプレッション・レベル、サブ・ハーモニクス・イン/アウト・スイッチ、サブ・ハーモニクス・レベル、アウトプット ●サイズ：483 (W) × 90 (H) × 267 (D) mm ●重量：12kg ●価格：¥63,000

上位機種種のサウンド指向を継承しながら、シンプルで使いやすい機能性を高めたMAGシリーズが進化、さらに高いコスト・パフォーマンスを実現させたのがMAG EVO IIシリーズだ。大きなライブ会場にも対応する大出力モデルながら、入手しやすい価格が魅力。取り扱いはやすさにも優れたソリッドステート仕様で、EQはベースとトレブルに加え、ロー・ミッド、ミドル、ハイ・ミッドの5バンドとなっている。加えて、ブライツやディープ・スイッチも備え、ベースの周波数域にマッチした細かい音作りが行なえる。上位機種で好評のサブ・ハーモニクスも装備し、1オクターヴ下のサウンドを原音にブレンドすることで、ヘヴィな重低音も作り出せる点も見逃せない。上品なかかり具合のコンプレッション、DI、エフェクト・センド/リターンやチューナー/ライン・アウトも用意され、現代のベーシストに求められる機能を網羅したオールマイティなアンプだ。



上位機種にも採用されているサブ・ハーモニクスを装備。ほかにもコンプレッサーを搭載するなど、妥協のないスペックを誇る。



10kHzの周波数帯をブーストするブライツ・スイッチ(上)と低域を増幅するディープ・スイッチ(下の左側)も音作りのポイントとなる。

Sato's Impression

音作りをしようと思っても、結局フラットな状態に戻ってしまう(笑)。



いや、こんな低価格でヘッドアンプが買えちゃうんですね(しみじみ)。しかし、今試奏している段階で、いろんなツマミを動かして音色を変えていたんですが、自分の好みを追求すると、最終的に、すべてのツマミがフラットな状態に戻ってしまう(笑)。アンプが持つ基本的なサウンドが良いからなんでしょうね。

おすすめセッティング Track41 (Track40=フラット)



このアンプはズバリ、3バンドのEQの間にある、340Hz、1.6kHzのツマミが音作りのポイントだと思います。このふたつの帯域でサウンドを微調整する、という感覚で音作りをすればうまくいくと思います。